

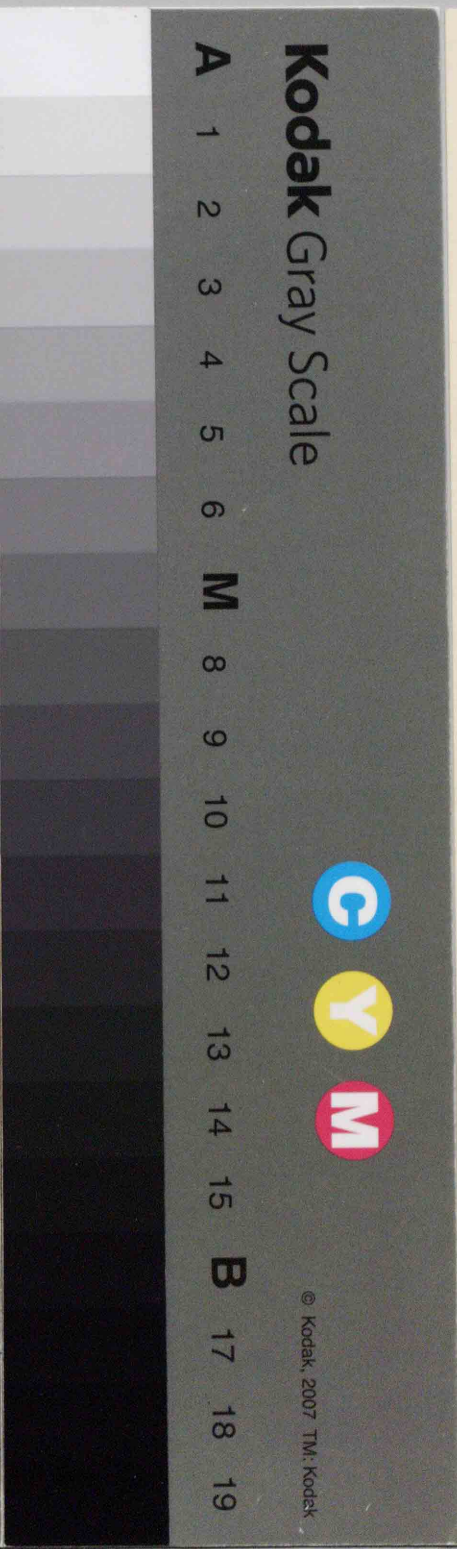
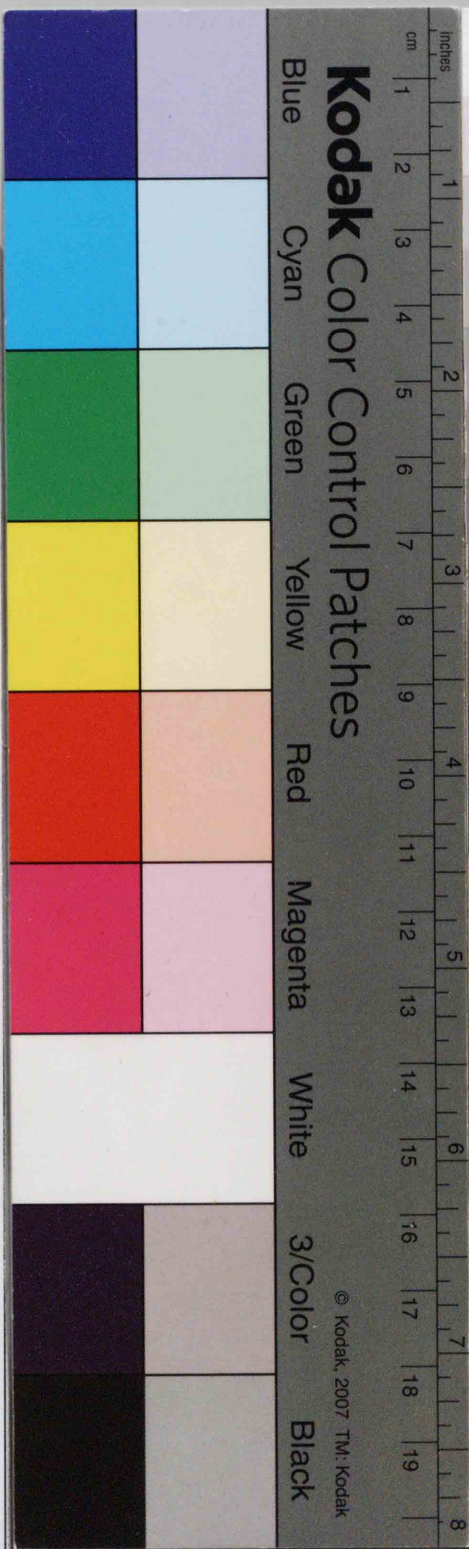
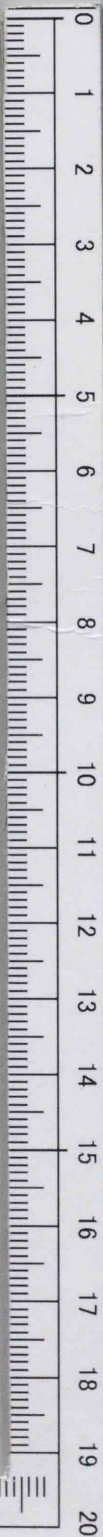
文部省檢定
大正十一年一月廿日

吉田彌平
編

中國教科書卷四

東京
光風館藏版

教科書文庫
4
810
41-1922
2000080454



41779

教科書文庫

4
810
41-1922
20000
80454

資料室

教科書文庫

4

810

41-1922

2000080454

文部省檢定

大正十一年一月二十日 中國學校國語教科書

4a
810
711

中國文教科書

吉田彌平編

卷四

東京 光風館藏版

4
L
H
A
M
P
S
O
N
S
P
R
I
N
T
E
D
I
N
T
O
K
Y
O
J
A
P
A
N
I
N
T
H
E
P
R
I
N
T
I
N
G
H
O
U
S
E
O
F
T
H
E
I
M
P
R
I
A
L
P
R
E
S
S
O
F
F
I
C
E
O
F
T
H
E
M
I
N
I
S
T
R
Y
O
F
E
D
U
C
A
T
I
O
N
A
N
D
S
C
I
E
N
C
E
S
O
F
J
A
P
A
N
I
N
T
H
E
P
R
I
N
T
I
N
G
H
O
U
S
E
O
F
T
H
E
I
M
P
R
I
A
L
P
R
E
S
S
O
F
F
I
C
E
O
F
T
H
E
M
I
N
I
S
T
R
Y
O
F
E
D
U
C
A
T
I
O
N
A
N
D
S
C
I
E
N
C
E
S
O
F
J
A
P
A
N

中國文教科書卷四

目次

一	明治神宮 その一	一頁
二	明治神宮 その二	九
三	山光水色	一六
四	水精の玉	三
五	秋の夜	三
六	月の洞庭湖	五
七	海上より	元

目次



八	船路	島崎藤村	三
九	四明が嶽	杉村廣太郎	三
一〇	武藏野	國木田獨步	四
一一	本多重次	新井白石	五
一二	表忠塔		五
一三	乃木將軍	森鷗外	五
一四	米國の印象		六
一五	英國の二大學府	加藤直士	六
一六	グラッドストーン	水野鍊太郎	七
一七	湖北の天地		七
一八	蘇武	坪内逍遙	八

一九	讀書	坪内逍遙	九
二〇	古今千遍	雨森芳洲	九
二一	南京の壺	柴田鳩翁	一〇
二二	わが袖の記	高山樗牛	一〇
二三	雪山の眺	鹿子木員信	一一
二四	岩倉右府その一	井上毅	一一
二五	岩倉右府その二	井上毅	一二
二六	君が御蔭		一二
二七	巴里より	島崎藤村	一三
二八	平和は成れり	近衛文麿	一三

目次終

唐杜牧の作

遠上寒山石徑斜

白雲生處有人家

停車坐愛楓林晚

西相葉紅於二月花

代々木の森

東京市ノ西郊代

代幡町大字代々

木ニアル森林

私
本文ノ作者溝口
白羊

中國文教科書 卷四

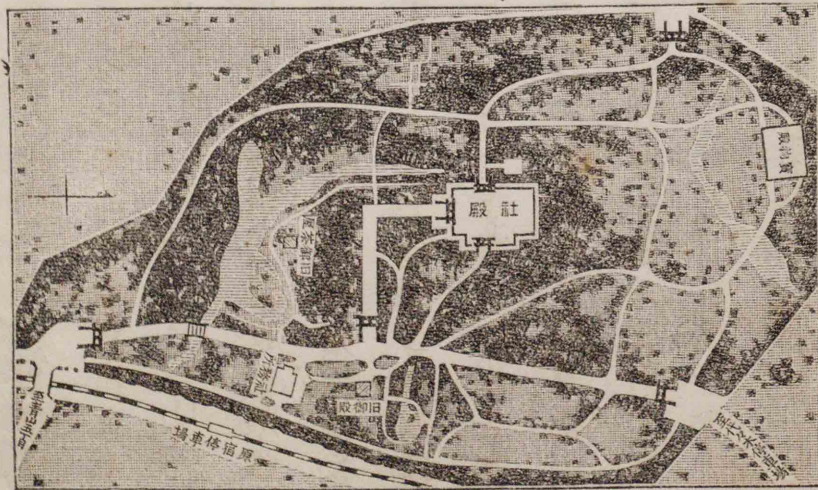
一 明治神宮 その一

快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域 眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つたとき、今更のやうに、其の改つた光景を見て強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が、尺、一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高

く超越して隠れた部面に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖徳と、海よりも深い昭憲皇太后の御懿徳と、そして此の二柱の大神の御恵みに對へ奉る國民の至純なる感謝の心情と、此の三つのものが陰に陽に工程を拂らせて、遂に此の記念すべき大工



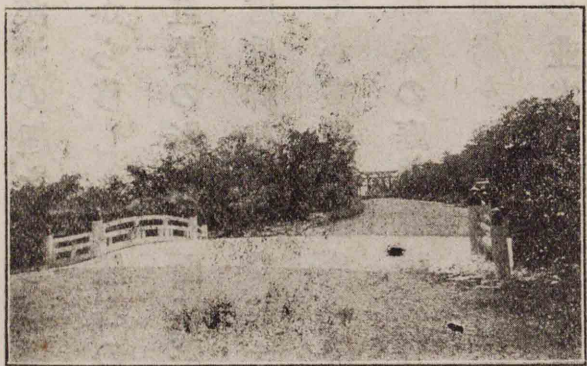
明治神宮平面圖

事を完成するに至らしめた原動力であることは、何人も疑ふことの出来ない明瞭な事實である。

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、百里二百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

今までの神社に會つて見たことの無い明治神宮の特色は實

にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで神



明治神宮神橋

宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一に此の事を直感した。そして一步々々、美しい小砂利の上を、神殿に近く踏入るに隨つて、愈、肅然たる心持になつて、深く襟を搔合せた。

參道の兩側には盡きること知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處

萬成
岡山縣御津郡石
井村大字萬成

からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて来る。岡山縣萬成産の石で出来てあるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致の好い細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が、今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總べてが繊細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。神橋を渡ると兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に千七百四十の樹齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。

原宿

東京府豊多摩郡
千駄ヶ谷町大字
原宿
千駄ヶ谷
東京府豊多摩郡
千駄ヶ谷町大字
千駄ヶ谷

土佐繪
土佐権守春日經
隆ノ創メタ繪畫
ノ一派

明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。

此の鳥居の在る處は南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄ヶ谷から來て居る幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で、右を見ると、ばつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭亭として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

二 明治神宮 その二

御社殿は樓門・拜殿本殿等の建造物を合せて、其の總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖の場所である。

何事のおはしますかは知らねども、

何事の
西行法師ガ伊勢
神宮ニ参拜シタ
トキニ詠ンダ歌

かたじけなさに涙こぼるゝ。

私は默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今ま

で見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、静寂な、併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隠す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを暴露して見せてゐる。然も、それでゐて、決して淺露な心持はせず、却て一層深く大きくされた靜寂シヤカトの中ナカから、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い威力が迫り寄るのを覺えるのだ。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して國民と近く觸接し、國民と親しく協力して新文明を吸収しようとして御勉め遊ばされた明治天皇の活

動的進取的の潤達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、びつたりと呼吸を合せてゐるやうに思はれる。

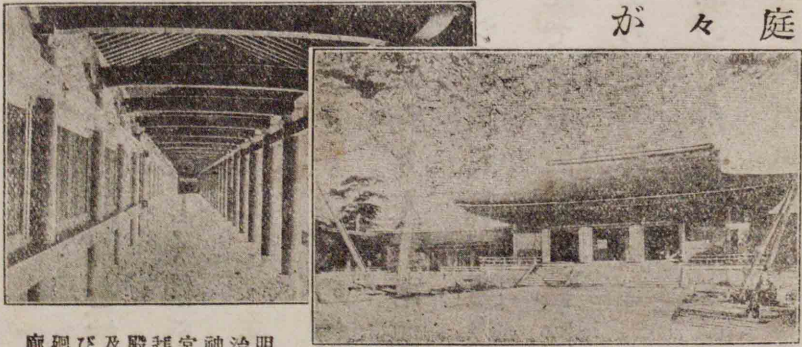
拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥につゞいて便殿の遠く望まれる心持、それら總べてが、又、たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亙る森林帯があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。

こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帯びて來て、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目に着く。

寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。

寶物殿は形式を中古時代に取つて、其の材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、之に使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及



明治神宮拜殿及廻廊

んだといはれてゐる。

後は一帯の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘をめぐつてわか／＼しい楓の樹が美しく植ゑつらねてある。

私は此の寶物殿まで來ると、再び元來た道を表參道の枡形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、即ち明治天皇昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝのもので、殊更技巧を弄しない處に何ともいへぬ優雅な趣を帯

びてゐる。此の御苑は祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生の上に點在してしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連り續いてゐる櫟や檜の雜木林にも、東京近郊では到底見る事の出來ない野趣がある。

私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりはすっかりもう深い靄に包まれて、黒々と晝でも暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白い色が暮れ残つて

續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。
私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える
素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な
曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられた
やうに残つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な、
幽邃な、優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて果して此の
深い印象を忘れる日があるだらうか。
(明治神宮紀に據る)

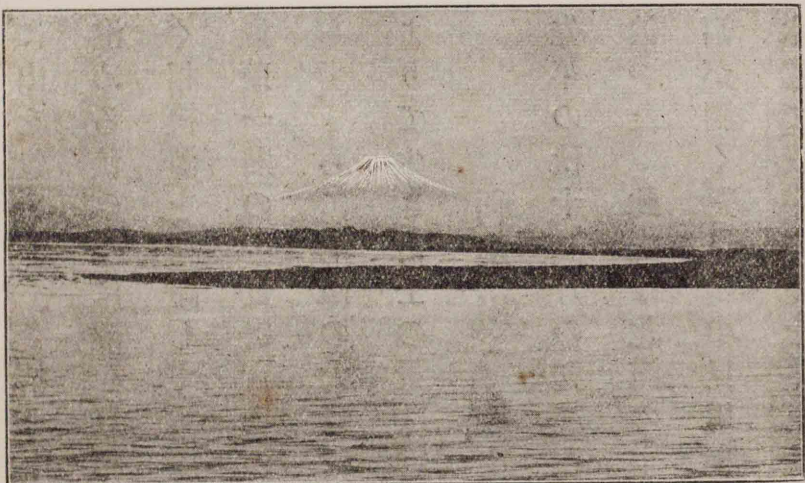
徳富健次郎

號ハ蘆花
文學者
明治九年生

三 山光水色

秋の富士山

徳富健次郎



相模灘より見た富士山

富士雪を帶ぶ。さやかに雪
を帶ぶ。
秋空何ぞ高き。風威を帶ぶ
る相模灘の怒號何ぞ壯なる。
此の空と此の海との間に、玲
瓏として立つ富士の秀色を
見ずや。
絶頂より五合目のあたりま
で、銀より白き雪は、桔梗色の
山膚を被ひて、上は隈なく、下
はさながら、あつちから笹縁とれるやう

に山を包めり。色清うして點塵なく日光に輝き、水よりも澄める秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立騒ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗皎潔神威も十倍するを覺ゆ。嶽頂一點の雪實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、さらに四圍の大景に眼睛を點ず。東海の景は富士によりて生き、富士の景は雪によりて生く。(自然と人生)

利根川の秋曉

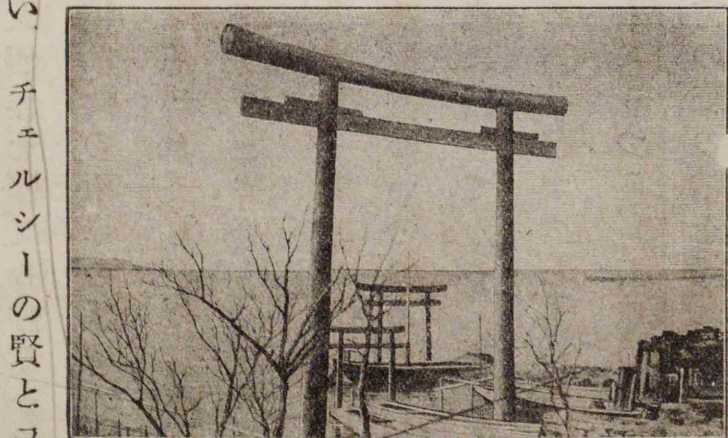
先年の秋十一月の初ごろ、利根川の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。此處は北浦の末流が利根の本流と落合ふ處で、川幅が濶く、對岸の小見川までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼をさますと、櫓の音がぎい〜と枕頭に聞

息栖
茨城縣鹿島郡息
栖村

小見川
千葉縣香取郡小
見川町

チエルシーの賢
英國ノ文學者カ
ーライル
(1795-1881)
コンコルドの哲
米國ノ文學者エ
ーソン
(1803-1882)

える。翌日黎明に起きた。宿のものはまだ寢て居る。そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で、雞が勇ましく曉を告げると、餘程たつて、川向の方から、いかにも微かな雞の聲が聞えた。大河を隔て、呼



息栖神社大鳥居

びかはす此の雞の聲は實によい。チエルシーの賢とコン

コルドの哲とは、實に此の如く大西洋を隔て、呼びかはしたのであらう。自分の眼には、曉は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る様に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も淡紅を流して、ほやり／＼水蒸氣が見えて來た。實に迅い瞬をする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に満ちてゐる。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少しうつろふ。忽ちきら／＼とまばゆき光が水にうつる。振返つて見ると、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。折柄その森の峙を離れた鳥が一羽、朝日を負うて、さな

がら曉を告渡る神使の如く、凜とした朝の大氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。うしろの小屋から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につけて、くわつ／＼と呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。水楊の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き吹き川に下りて、河水を掬んで口を嗽ぎ顔を洗ひ、それから遙に筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あゝ實に好い拜殿である。」と自分は思つた。(自然と人生)

幸田露伴
名へ成行
文學博士
慶應三年(三五七)
生

四 水精の玉

幸田露伴

玻璃盃に 汲みて湛へし

玉川の 玉なす水に、

水精の 水なす玉を

そと入れて、 しづかに見れば、

蘆の葉の 白露墜ちて

行く川に 痕無きが如、

水の中に 玉の影なく、

玉の前に 水の色なし。

濁なき 水と澄む世に

曇なき 玉と身は生れ、

相容るゝ 心すゞしく

我が名も無くて 過してしがな。(東亞の光)

五 秋の夜

幸田露伴

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光はをさなき童の髪
の如し。めでたきことは誠にめでたし、なつかしきことも
誠になつかし。されど、なほ聊か物足らぬ心地す。冬の月
は水晶もて作れるものを見るが如し。清さは餘りありて
味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果
より、松の樹の間より、又は市中の壘の浪間より出でたる、目

さまざま心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、ただ我が魂の世に浮かるゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身にしみ入るやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日六日の月の、ふと見る夕暮の空に出で居りて、雜木の梢もろこしの垂葉などに風かすけく叫くまづおもしろし。遠山黒く暮れて、素月輝を揚げ、庭樹のそれ〴〵潤葉纖葉の葉表の照葉蔭の闇おのがじし畫趣を爲し詩情を作りて、合して爽涼清澄の景を醸し出すさま、いづくにも有りふれたることながら好し。夜更け蟲吟じて、世の中靜かなる時、たまく燈前に書をさしおきて、起つて廊を歩むをりから、窓の白きを

見て戸を排き出て出づれば、月天心を過ぎて光華六合に瀰り、霜に澄める夜の氣は水まささに凍らんと欲するが如くなる、身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、月ならではと思はる。(洗心録)

六月の洞庭湖

佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三層樓である。城壁の甃瓦は幾百年の風霜に黒ずんでゐる。建てなほしてまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として耀いてゐる。その色彩の配合が極めて美觀である。船をすて、上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋がある。

佐々木信綱
御歌所寄人
文學博士
明治五年生
岳州
支那湖南省岳州府

范文正公

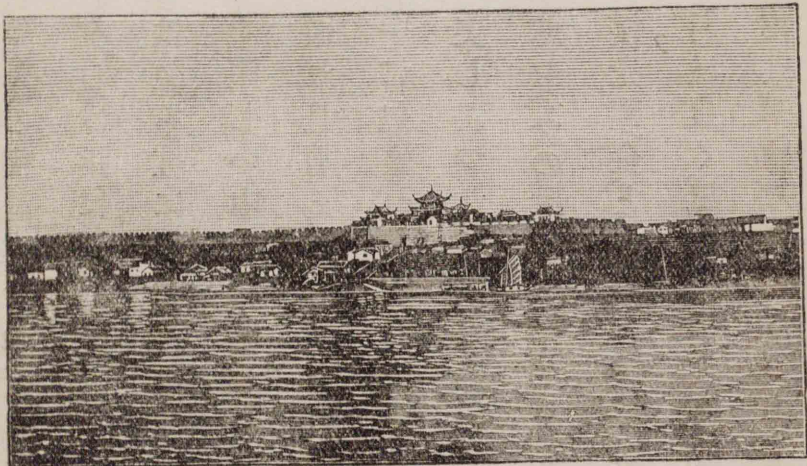
宋人范仲淹

(天聖一七三)

ソノ岳陽樓記ニ
「遠山ヲ衝ミ長
江ヲ吞ミ浩々湯
湯横ニ際涯ナシ
朝暉夕陰氣象萬
千此則チ岳陽樓
ノ大觀ナリ」ト
見エテキル

それは、蘆のまる屋とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた
低い家である。その間を通りぬけて高い石段を上り、城門
をぬけて岳陽樓を訪うた。案内の僧に導かれ、壁に題した
詩や聯の句などを讀んで三層樓の上に登つた。かの范文
正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變
り世は遷つても、天然の景には變遷がない。唯見る、浩々湯
湯洞庭湖は目の前に天地の大幅を廣げてをる。湖の門戶
には彼の堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左に
ある。どちらも江の島位の島で、さながら洞庭宮を守る獅
子、狛犬である。夕日は今や其の眞中に落ちようとしてゐ
る。天地の大觀に覺えず吾を忘れて眺めて居たが、促し立

瀟湘八景
平沙落雁
遠浦歸帆
山市晴嵐
江天暮雪
洞庭秋月
瀟湘夜雨
漁村夕陽



岳陽樓

てられて船に歸つた。
幸に風は追手。帆を張つて愈、
洞庭湖を横ぎらうとする。夕
日は二つの島の間に落ちて、見
る見る紅の眞玉が湖心に沈む。
顧みれば岳州府城の上に月は
昇る。さながら、洞庭八百里、月
照岳陽城。といふ詩の通りであ
る。日を數ふれば恰も舊曆十
月十五日の夜で、かの瀟湘八景
の一なる洞庭秋月ではないが、

皓月千里
岳陽樓記中ノ句

望月の夜、洞庭を過ぎるとは、何といふ好因縁であらう。夕日は遂に湖心に沈んだ。その餘光が空に耀くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、晝にも寫し難く麗しい中を、遂に一帆又一帆。風のまにまに、遠く近く、且顯れ、且消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばと思はれる。美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月は愈澄みのほる。見えるものは唯黄金、白銀の波。「皓月千里、浮光躍金」といふ有様である。月は良く、風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける、月はいよゝゝ澄む。此の意人の識るなし。言

ひ知らぬ楽しさ、寂しさ何ともいひ難き感が胸に充ちて、我が身そゞろに我あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。一昨年の初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月。かれは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあはれで、風月の縁に富むことを天に謝したことであつた。(帝國文學)

七 海上より

水上瀧太郎

十月三日。日本に通じる無線電信は今晚でおしまひだと電信局の人が注意に來てくれた。

カウカイブジ

水上瀧太郎
阿部章藏ノ雅名
明治二十年生
十月
大正元年九月二
十八日ニ横濱ヲ
出帆シテ北米カ
ナダニ航シタ海
上ノ一日

といふやうなのが、いくつも繰返されてゐるのである。自分も父母を喜ばせるために、何か一言いひ送らうと思つたが、無事といふ以外にいひたい事は何もなく、さりとして、たゞ無事といふだけでは、あんまり物足りなさ過ぎるので、手帳を出して、あれこれと近頃の自作の歌の中から適當なのを選ばうと思つた。

景樹の流れを汲んで和歌を詠まれる母は、自分達兄弟姉妹が、時折父母の家を離れて旅にでも出た時とか、或は母自身が家を留守にされた時に、必ず吾等に對して子を思ふ親の心を三十一字に籠めては書きこされるのであつた。見やう見眞似で、兄も姉も、幼い時から歌を詠み習ひ、母から送ら

景樹
香川氏
號ハ桂園
徳川時代後期ノ
名高イ歌人
天保十四年(五
三)歿
年七十六

れた時には返しをするといふ風であつた。自分も何時かそれに倣つて、旅好きの身の旅先から、強ひても母の好きさうな古風な歌を詠んでは書き送るのを習とした。

丁度此の夏も、自分は自分の拙い歌を拙い文字で認めた行く先々の驛路の繪葉書の、いかばかり母を慰めるかを思ひ、又知る人の訪ひくるまゝに、いかに母がほこりに人々の前にそれを示されるかを想像しながら、九州路の旅に日を暮した。

しかし、今自分の手帳には旅の歌が一首もなく、船に来てからも、時折は、切れぐに浮ぶ想ひを歌はうとつとめはしたけれど、どういふものか、どうしてもそれがまとまらないの

であつた。且書きとめたその切れぐの思想は、いづれも故郷を去り、父母の家を離れて、心の嬉しさ氣安さを思ふといふやうな意味の句ばかりで、それが鉛筆の痕鮮かに目に映るのである。「父母の家を離れし氣安さを旅に知る身もはかなかりけり」といふのが、そばに疑問點をつけたまゝ、纔に纏りけた一首であつた。

けれども自分が父母に送るべき歌はそんなものではない。成るべく心配させないやうに、海上の平穩なことを知らせ、併せて父母の家を片時も忘れないといふ意味を含ませなければならぬ。幾度もく、短いありふれた句を手帳に書いては消し、書いては消したあとで、あれこれとつな

ぎ合せて、漸く左の一首にまとめあげた。

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリ、

チ、ハ、ノイヘコヒントオモヘド。

自分はその電報が丁度父の寢酒の時刻に我が家に着くやうに、無線電信掛の人に頼みこんで、それで今日は一層安らかな心になつた。

父は近頃頓に量の少くなつた酒に陶然としながら、なんだ、つまらないといふやうな顔をして見られるにちがひない。しかし、その心中の嬉しさは、隠さうとしても、隠しきれず、見ないやうな風であるながら電報の歌を諳んじられるにちがひない。母はもうたまらなくなつて目さきに涙をにじま

せながら、幾度もくく口ずさんだ後、妹にも、弟にも、さては女中たちにまでも讀聞かせられるにちがひない。明日からは、彼の家の夫人、その家の奥さんたちに逢ふ度毎に、我が子の歌を唇にのぼせられるにちがひない。自分にはよくそれが見えるのであつた。(海上日記)

八 船 路

島崎藤村

島崎藤村
名ハ春樹
文學者
詩人
明治五年生

海にして響く艫の聲、
水を撃つ音のよきかな。
大空に雲はたゞよひ、
潮分けて舟は行くなり。

静かなる空に透かして
青波の深きを見れば、
水底やはても知られず、
流れ藻の浮きつ沈みつ。
3 緑なす草のかげより
4 涌出づる泉ならねど、
1 おのづから満ち来る潮は
2 海原のうちに溢れぬ
さながらに遠き白帆は
群をなす牧場の羊、
吹送る風に飼はれて

わたつみの野邊を行くらん。

雲行けば舟も随ひ、

舟行けば雲もまた追ふ。

空と水相合ふかなた、

諸共にけふの泊へ。(藤村詩集)

四明が嶽

比叡山ノ絶頂ノ

名

杉村廣太郎

號ハ楚八冠

新聞記者

明治五年生

窓

比叡山ニアル天

台宗大學寮ノ窓

九 四明が嶽

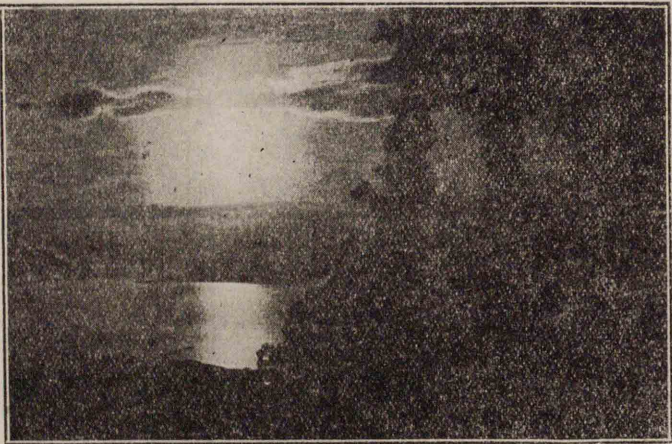
杉村廣太郎

曉に至りて寒さ漸く加はり、山氣峻厲夢屢破る。起つて窓を開けば、夜來の密雲いつしか全く霽れ、星斗闌干として、残月淡く西に在り。東谷の老杉皆月を浴びて、光水の如し。耳を欻つれば、遙に秋葉の風に動かされて蕭颯たるを聞く。

四顧闐として聲なし。坐して天の明くるを待つ。月益淡

く、東漸く白し。

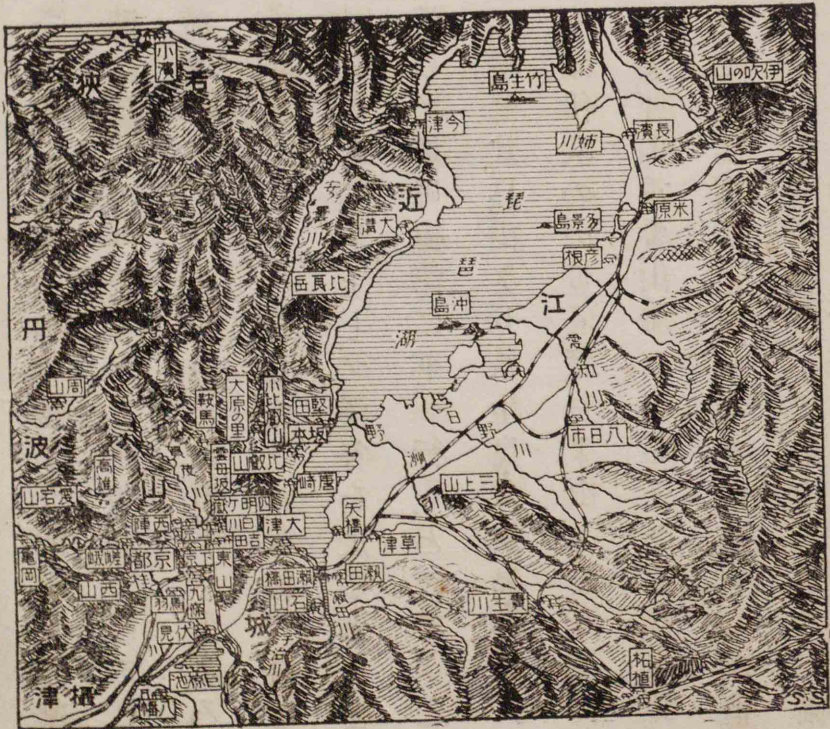
昨日、杉と杉との間、雲霧深く罩めたるもの、今朝明け來れば、彼方に村落を現じ、此方に田圃を生じ、乍ちにして森林出で、乍ちにして丘陵來り、近くは堅田の里、遠くは三上の山、刻一刻その藏むる所を顯し來る。やがて暎光輝々、有るかぎりの山河、大地盡くその姿を現じ了れば、こゝにその村や川や森や丘を



比叡山上の日の田

左にし、右にし、前にし、後にし、後にして、一大湖のその正中に出現し
 來るを見る。壯觀言ふべからず。
 朝食を終へて出づ。湖光爽涼、沖島、多景島、竹生島を數ふべ
 く、堅田、唐崎は指顧の間に在り。行きく、て道を雲母坂に
 取り、比叡の絶頂四明が嶽を攀づ。雲母坂より登るに、既に
 一巨木を見ず。僅に進めば、矮小なる灌木もなく、到る處唯
 茅小篠の生ひ繁れるを見るのみ。幾條の峻坂を攀ちて遂
 に最高峯に達す。巨巖に踞して京都を望むに、雲淡くその
 上に棚引き、微に北は西陣、南は九條の邊を見得るのみ。眸
 を北に轉ずれば、小比叡を隔て、遙に大原の里の山谷の間
 に潜めるを見る。

凡そ四明の勝は、
 江城二州に跨り、
 超然として群山
 を抜き、東の方琵琶
 の大湖と、西の
 方京攝の平野と
 を一眸に集め得
 べき處にあり。
 之を水にしては、
 北、琵琶の胴腹が
 堅田、唐崎に至り、



比叡山附近地圖

窄まりて轉手となり、更に瀬田・石山の邊より瀬田川となりて一たび連山の間、に隠れ、潜み流るゝこと幾里にして、更に遙なる彼方の山麓より宇治川となりて流れ行くところ。賀茂・桂の二川が東西より洛中を抱きて流れ、末終に合して一となり、さながら白蛇の蜿蜒として溪谷を走るがごとく、遠く山谷の間を縫ひて、遙に攝津に下り行くところ。之を山にしては、湖北の峻峰比良山より竹生島・多景島・沖島に下り、更に南して、遠くは伊吹の山、近くは三上山となり、遂に瀬田川の南岸に沿ひて、連山重疊、山城に入るところ。小比叡より大原の里を経て、鞍馬・高雄となり、高きは愛宕の山、低きは嵯峨の峽、而してその末漸く陵夷して、兩山一帯の河攝の

方に消えゆくところ。湖畔にしては、堅田・坂本・唐崎・大津、さては瀬田の長橋に汽車の煙を揚げて走るところ。山西にしては白川・吉田・上京・下京・鳥羽・伏見・巨椋池の淡靄を貫きて旭光にきらめき渡るところ。山を繞りてたゞこれ宛然たる一大パノラマなり。恍として覺えず起つて長嘯すれば、聲は四明の白雲を越えて、遠く江城河攝の野に傳はる。

(へちまの皮)

一〇 武藏野

國木田獨歩

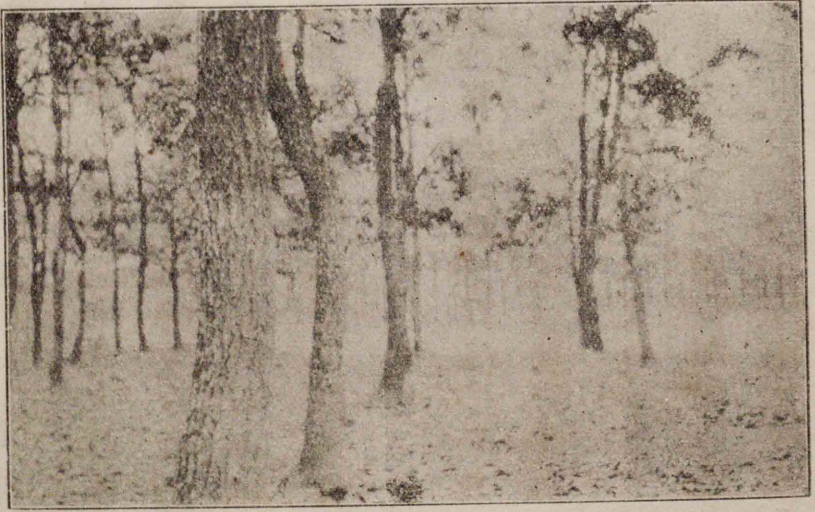
昔の武藏野は目のとゞくかぎり萱原であつたやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏

國木田獨歩
名ハ哲夫
文學者
明治四十一年歿
年三十八

野の特色といつてもよい。林の木は重に檜の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌え出る。其の變化が秩父山脈以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠陰に、紅葉に、様々の光景を呈する。其の妙は一寸西國地方又は東北の者には分りかねるのである。

檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く、風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木ノ葉が高く大空に舞つて、小鳥の群の如く遠く飛去る。木の葉が落ち盡せば、數十里四方に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が

一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月廿六日の日記に、林の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想すと書いた。此の傾聽といふことが、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つて居るだらう。秋ならば林の中より起る音。冬ならば林の彼方に



武 藏 野

遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく、蟲の音。空車、荷車の、林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴ちらす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣のエでだしぬけに起る銃の音。

殊に時雨の音に至つては、是程閑寂なものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて、

しのびやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽かたで又鷹揚な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。

自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又人跡絶無の大深林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人懐かしく私語くが如き趣はない。(武藏野)

一一 本多重次

新井白石

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出来て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その驗

新井白石
 名ハ君美
 徳川時代ノ大儒
 享保十年(一六三〇)
 歿
 年六十九
 徳川殿
 徳川家康
 本多重次
 通稱ハ作左衛門
 徳川氏ノ臣
 文祿五年(一五九六)
 歿
 年六十八

なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて御跡の事ども仰せ置かる。人の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程々に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

重次御枕に取りつきて泣くく、申しけるは、殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔此の病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。と申す。諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。この上醫療其の詮なし。且は命を惜むに似たり。とて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、斯程大事の腫物軽々しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又良醫

して治し參らせんとするをも用ひ給はず、失せたまはん事、



新 井 白 石

御心がらとは言ひながらあつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼争でか治し參らすべき。年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば御先へ參らんとて、御前を罷立つ。

「あれ止めよ」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引留め、仰

筆蹟
 爲新曆之御賀預
 貴翰忝致拜見候
 御萬福御慶新之
 事珍重令存候拙
 者事無恙迎歲仕
 候少而去冬者御
 精選之一冊御芳
 惠不知所謝前書
 一縷々呈謝之事
 候定而其書可達
 几下奉存候猶期
 永日萬慶可申伸
 候恐惶謹言
 新井勘解由
 君美
 正月廿五日
 稻若水様
 貴報

せらるべき旨あらせられ候。といふ。重次大いに聲を怒らして、最期の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿ばらの止めやうや。と罵つて出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。といはれて、げにさも候。とて御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果てぬに、縦

お新井様へ
 貴翰忝致拜見候
 御萬福御慶新之
 事珍重令存候拙
 者事無恙迎歲仕
 候少而去冬者御
 精選之一冊御芳
 惠不知所謝前書
 一縷々呈謝之事
 候定而其書可達
 几下奉存候猶期
 永日萬慶可申伸
 候恐惶謹言
 新井勘解由
 君美
 正月廿五日
 稻若水様
 貴報

新井白石筆蹟

ひ家康が命をはるとも、汝が世に在らんを頼にこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に残りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。と仰せければ、「いやいや、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、その詮なし。重次、若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに餘つて、世に交らんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くならせ給ひなば、他人まで

御掣
家康ノ女婿北條氏直
天正十八年(三五)卒
〇年三十

武田
武田勝頼
天正十年(三四)織田徳川ノ兩軍ニ攻メラレ、天目山デ自殺シタ
年三十七

も候まじ、まづ御掣の北條殿、我が國々を取らんとし給はん
に、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち
別れて氣後れしはかゝしき矢の一筋をも射出すこと叶
ふべからず。當家滅されんこと、亦踵を回らすべからず。
重次それまで存へて、あの年よつたるかたはものは徳川殿
の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命
なればかく世に恥をさらすらん」と後指さされん事、老の恥、
何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田の家の人々
御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを世
にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて
候と存ずれば、殿におくれ參らせんが悲しきばかりにも候

はず、我が身の果もあさましきによつて御先に死すること
にて候と申す。

「汝が言ふところ、ことわり至極せり。さらば醫療のことは
汝が心に任すべし。天命すでに至りて、家康空しくならん
とも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一
日も生残つて、後の事よきにはからふべしと存ずるや否や」と
仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかで
また仰をや背くべきと申す。「さらば醫師召させよ」とて召
さる。

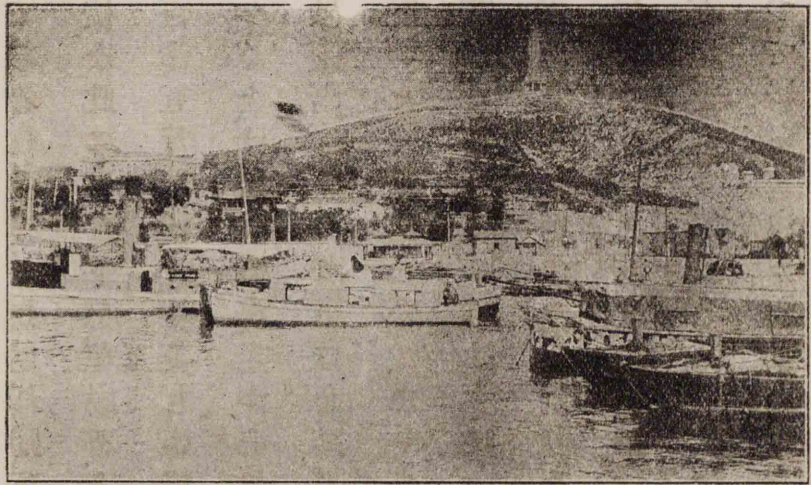
醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし」と申せば、重次艾取
つて据う。御灸の痛覚えさせ給はねば、艾を増し加ふるこ

と多くして後、聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御薬をつけて参らせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れて、膿水・血、夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませたまへば、重次は嬉し泣に聲を限に泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。(藩翰譜)

一二 表忠塔

一面に小松を植ゑちらした白玉山を電光形にぐんぐん登つて表忠塔下に來た。海拔四百八尺、新舊市街の中間に聳え立てる此の山の頂からは、旅順を一目に見晴し、東には茫茫たる海を眺め、表忠塔の建立場としては、げに絶好の位置

である。遠くより見れば、巨大な白蠟燭を山上に突立てた様な此の塔は、下を花崗石、上をコンクリートにして、高さ二百十五尺、如何にも美しい燈臺式の記念碑で、塔頂に電燈がつくと、十數里の海上から見えるといふことである。塔内は十階になつて、階段を踏んで登れるのだが、今日は時刻が晚いため、登れなかつた。塔下の小苑に金盞花の赭黄ろい花が、まだ霜枯れもせず咲いて居る。表忠塔を背に、平たく削りならされた山頂を北へ歩いて鳥居をくゞり、石段を上り、納骨祠に詣でる。白玉山の北端に石垣を四角に築きあげ、上に小さな石造の祠が南面して立つて居る。白玉神社といふさうな。旅順を落す爲に命を



捨てた海陸軍人二萬二千七百餘の白骨が此の下に埋めてあるのだ。

表
何時しか落ちかゝつた日は
紺色の雲の間から生々しい
忠
血の色を見せて居る。と見

れば、我等が立つ白玉山を繞る旅順界限の山又山、狐の皮の如く霜枯れた裸山、破壊された砲臺の山、生命の去つた荒涼たる山々は、雲間漏る落

日のために赫として茶褐色に燃え切つた空氣の中に、毒々しい程はつきりしたパノラマを現出した。其處に一發の砲聲も響かず、一聲の人語も聞えぬ。風すらも吹いては居らぬ。自然は鳴をしづめて居る。而して其の強烈な色彩を以て旅順の山河は今叫喚をあげて居るのだ。十年前、二十年前、二度までも人の子を殺しあふ修羅場となつて、溺る程の血を浴び、嘔くまでに血を飲まされた旅順の大地は、今、夕陽に血を吐返し、死の苦みを苦しみがいて居るのだ。息もつまるばかり凄惨の氣に打たれて、やゝ久しく納骨祠畔に佇む。
血を吐く瀕死のものがきは、やがて蒼ざめた死の黄昏に移つ

た。外套の襟を立て、もぞく／＼する程空氣は冷えて來た。でも、まだ去りもやらずそこに佇む。背後にも、けはひがする。牽かるゝやうに振りかへる眼を、ぱつと天來の光が射る。表忠塔が光り出したのである。

「あゝ、光が。」

ほつと息をついて、塔を見上げた。二百十五尺の白塔の上ぐるりとついた電燈は、白い光の環をなして中空高く瞬きつゝ、地上望め、海よ仰げと、黄昏の空に耀いて居る。その光は、そも何を宣るか。「不死」でなくてはならぬ。

「不死」

白骨よ、眠れ。大地よ、黙せ。光は死なぬ。死なぬものが光る。光は最後の勝利者である。いさゝか慰められて納骨祠に別れる。(死の蔭に據る)

一三 乃木將軍

森 鷗 外

森鷗外
名ハ林太郎
文學博士
醫學博士
大正十一年歿
年六十一

つはものゝ、武勇なきには、あらねども、
眞鐵なす、ベトンに投ぐる、人の肉、
往く者は、生きて還らぬ、強襲の
鋒を、しばし轉じて、右手のかた、
圖上なる、標の高さ、二零三、

巔の 二つ聳ゆる 石山に
 たえくの 望のいとを 懸けてこそ、
 きのふけふ、 軍の主力を 向けてしか。

二

霜月の 三十日の 夕まぐれ、
 將軍は 高崎山の 師團より
 たゞ一騎、 柳樹房なる 本營に
 歸らんと、 曲家屯をぞ 過ぎたまふ。
 ほの暗き 道のほとりを 見たまへば、
 身うち皆 血に塗れたる 卒ありて、
 そびらには、 はやこときれし 將校の

亡骸を かきのせてこそ 立てりけれ。

三

「汝は誰ぞ。 そを何處にか 負ひてゆく。」
 「聞召せ、 背負ひ奉るは 奴わが
 主と頼む 乃木將軍の 愛兒なり。
 年老いし 將軍の家の 二人子、
 そのひとり 勝典ぬしは いちはやく
 南山に うたれ給ひて、 残れるは
 おとうとの 保典のぬし ひとりのみ。
 背負へるは その一人子の 亡骸ぞ。」

四

父君は 心をしく、 我が主をも
 隊附の まゝにあらせて、「討死の
 身の果は おのれと三人、 葬をば
 ひと時に 營め」と宣り 給ひしを、

皇軍百萬征強虜 野戦攻城屍作山
 愧我何顏看父老 凱歌今日幾人還

乃木希典筆蹟

人々の 強ひて計らひ つるにより、
 さいつ頃 友安旅團の 副官に
 職かはり、 まだ程經ぬに、 この朝開

あへなくも 空しき骸と なりましぬ。

五

果てまし、 處は高地 二零三。

目鏡もて 敵の備を

望みます うら若き

額のたゞ中 打ちぬかれ、

ひと言を のたまはん

ひまもなく、 持口の

南の峰に うせたまふ。

その骸を 奴背負ひて、

ありと聞く 野戦病院

この村に
 たづぬれど、



乃木保典 乃木勝典

くるほしき 心からにや たづねえず。

六

かくいふを 駒をとめて 聞きまし、

將軍は、 病院の旗 ある方を、

鞭あげて 「彼方にこそ」と さし給ふ。

面ざしは たそがれ時に 見えねども、

目ざとくも 雲の絶間ゆ 覗ひし

さむ空に まだ輝かぬ 冬の星、

更闌けて、 友なる星に、 「將軍の

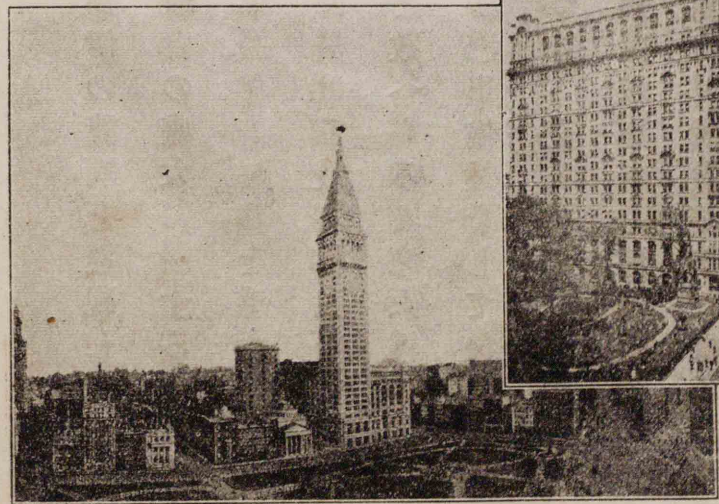
睫毛だに 動かざりき」と 語りけり。 (うた日記)

一四 米國の印象

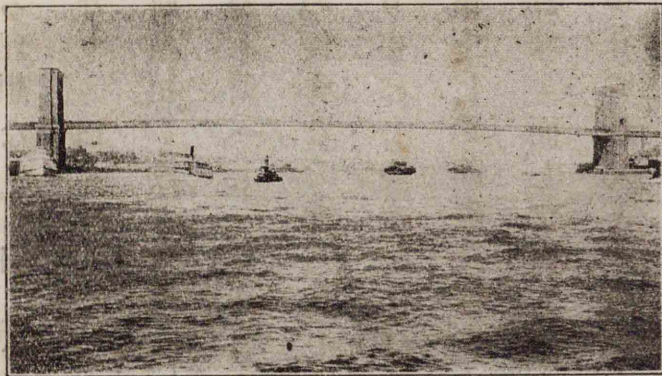
戦争の創痕尙癒えざる英佛獨伊の諸國を巡視したる人が、大西洋を渡り來りて一たび紐育の盛大に接する時は、必ずや心中密かに歐洲時代の最早過ぎ去れるを感ずるなるべし。實に今日の紐育は世界に於ける最も偉大なる驚異の一なり。かの四十階、五十階と數へらるゝ摩天樓の碧空を貫きて林の如く立てる大觀が、巴里倫敦をして後に瞠若たらしめつゝあるは言はずもがな。茫々として海の如きハドソン河口に八十方哩の投錨區域を有し、何萬噸の大船を何隻となく導き來りて其の棧橋に横附となし得る港を築けるなど、紐育は實に天然の地利と人間の智巧とを兼ね備

ハドソン河
米國ノ東部ヲ流
レテハドソン灣
ニ入ル大河

へて、現代文明の恩澤を最も多く享受しつゝありと云ふも過言に非ざるなり。若し夫れ第五街に至りては、其の街衢の壯麗雄大なる、其の店頭に陳列せられたる商品の豊富潤澤なる、買物に出かけ來る貴婦人等の服裝の華美優雅なる、到底倫敦のボンド、ストリート、巴里のリユー、ド、ラ、ベ



メトロポリタン生命保險會社と紐育市街



ブリクワール橋

イなどの遠く及ぶ所に非ず。更に歩を轉じて商業の焦點たるウォール街に出でんか、狭き道路の兩側には幾十層の巨閣、高塔軒を並べ、舗道より仰ぎ見るに、屋根と屋根との間より僅に蒼穹の一端を覗ひ得るのみにして、日光も影薄く晝尙暗き其の下を、富の探求に熱狂せる人々目も眩まんばかりに來往し、肩摩穀擊の大雜沓を呈せるは、倫敦に於ける英

蘭銀行前の比に非ざるなり。

凡ての點に於て世界第一たらんとするが米人の無邪氣なる理想なり。曰く、「ウルウォースの建築は世界最高の建築なり。」曰く、「ブルックリンの長橋は世界最大の鐵橋なり。」と。斯の如く數へ來らば、紐育だけにも無數の世界第一を發見し得べし。然るに米人は近年に至り、自己の世界的地位の優秀なるを自覺し來ると共に、かゝる子供らしき理想より更に一步を進め、紐育を以て世界の金融を掌らしめ、華盛頓をして國際政治を支配せしめんとする意氣込を示し來れり。而して吾人は米人の此の理想が今や着々として實現せられんとする傾向あるを否認する能はざるなり。

（歐米見聞録に據る）

第三學期

加藤直士
新聞記者

オクスフォード
倫敦ノ西六十哩
テムス河ノ上
流ニアル
ケンブリッジ
倫敦ノ北五十哩
ホドノ處

一五 英國の二大學府

加藤直士

戰時に於ける英國の學府はどんな模様かと思つて、僕は過ぐる二週間にオクスフォードとケンブリッジへ遊びに行つた。オクスフォードは倫敦の西方、ケンブリッジはその北方、何れも一時間半程の汽車里程で、丁度倫敦と三角形になつて居る。一通りの見物だけならば樂に日歸りも出来るが、逢ひたい校長や教授もあり、ちと調べたい事もあつたので、僕は一夜泊りでゆつくり遊んで來た。一概にオクスフォード・ケンブリッジと云へば、英國の二つの大學のやうに思ふ人もあらうが、それは少し違ふ。兩地

には何れも二十餘個のカレッジなるものがあり、其の多くのカレッジを總稱して、一はオクスフォード大學、他はケンブリッヂ大學と云ふのである。勿論各カレッジは一の機關の下に統一され、相互の間に密接な聯絡もあり、共通の設備も出來てゐるのであるが、各カレッジは或意味に於て立派な獨立團體で、各其の歴史を重んじ、其の特長を發揮してゐる點は、個性の尊重を主義として居る英國の學風にふさはしい制度である。

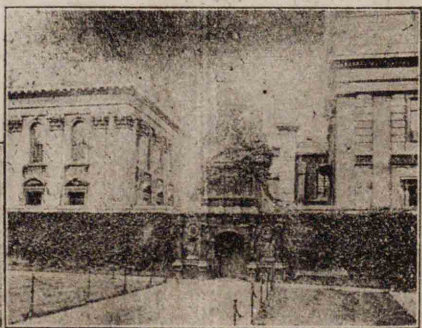
煤煙に燻れて居る倫敦を去つて、綠林牧野に取圍まれた幽邃閑雅の大學市に行つて見れば、命も延びるやうな氣持がする。中世紀其の儘の古色蒼然たる大建築、其の建物の中

心となつてゐる教會堂の空に聳ゆる尖塔、學生本位の質素な商店の家並、何れも心地よい感覺を與へて、學問をするには如何にも適當な場所だと思はしめる。

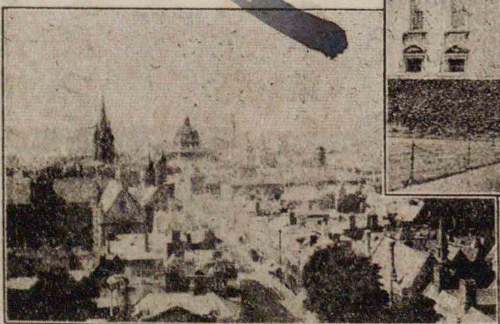
兩大學とも平時は何れも三四千人の學生を有し、街頭で出會ふほどの者は悉く書物を小脇にはさんだ學生か、角帽ガウンの教授たちであるに、戰時の今日は光景全く一變して、學生の三分の二は義勇兵となつて出征してしまひ、殘る三分の一中にも、地方軍に投じ、軍服のまま、教場に出席して居る者が澤山ある。壯年教授の中にも軍服姿で教壇に立つて居る人があるのみならず、校舎は大抵軍隊の宿舍に充てられてゐるので、大學市は今や一變して大きな軍營地と成

り了つた観がある。オクスフォードはそれほどでもないが、ケンブリッジのごときは、全市軍人で埋められて、學生は殆ど姿を認め得ぬ程である。聞けば大學では少しも義勇兵應募の奨勵をした事はなく、全く個人の自由に一任したのであるが、學生は争うて自ら國難に赴いたのであるとか。學生として此の大戦争に参加しないのは一種の恥辱の如く考へて、事情の許すかぎり義勇奉公の一途を選んだものらしい。現に醫科大學の學生の如きは、寧ろ大學に在つて將來の爲に素養を積んで貰ひたいと云ふキツクナリ元帥の内諭があつたにも拘らず、どしどし學業を擲つて出征軍に投じた。是は已むに已まれぬ愛國の至情に驅られて起

つたものとして大に感ずべき點である。一面より見れば、學生の身としては、ちとあわて過ぎた感がないでもないが、實はこゝが英國學生氣質の最も美はしい一面である。元來英國の大学生は、只一生懸命に勉強して學校を卒業し、さへすればそれでよいとは考へて居ない。彼等は學生時代を單に一生の準備時代と心得ないで、寧ろ一生の最も光榮ある愉快なる一時代



學大ヂョリブンケ
市ドレオフスクオ



人生の最も意義ある一部と心得て居るのである。日本の學生は卒業が目的であるが、英國の學生に取つては如何に學生時代を樂しむべきかが問題である。つまり學生時代に既に一個の紳士として生活して居るのである。そこで場合によつて一年や二年卒業の時期が後れるくらゐの事は一向何とも思つて居ない。寧ろ自分に最も會心な意義ある生活を學生として送ることが、彼等に取つて一番大切な事になつてゐる。大學を卒業して一定の學位を取る學生の割合に少數であるのは、これがためである。

とはいへ、彼等は決して學業を忽にする譯ではない、隨分根氣よく勉強もする。併し彼等は愉快に勉強する、餘り無理はしない、只一定の課程を馬車馬のやうに一目散に驅けて通ればそれでよいとは思つて居ない。今回の如き世界の
大亂に際し、國家の大事に臨んで、國民としての第一の義務を果す事は、學生として最もふさはしい事であると考へて居る。そこで彼等是一個の市民として争うて義勇兵の募集に應じた。勿論戰場で死ぬかも知れぬ、それも義務の爲には毫も躊躇する所ではない、幸に無事に凱旋するを得るならば再び學生となつて勉強するのである。
オクスフォードも、ケンブリッジも、其の宏壯な大學の建物は、大抵空屋のごとく森閑として居た。テニスコートやク

リケットグラウンドも草が生ひ茂つて、運動家の姿は稀であつた。學生のカフェーはカーキ服で賑つて居た。併し日々の學課は規則正しく続けられてゐた。僕の訪問した七十餘歳の老教授は、近頃助教授が出征したので、老人は却て忙しいと語つて居た。オクスフォード近郊の農家には負傷兵が澤山收容されて、赤十字旗が到る處に翻つて居た。ケンブリッジには廣大な臨時病院が建て列ねてあつて、多くの負傷兵が芝草の上に横たはつて居た。僕が或カレージの長を訪うて、英國は最後の勝利を得るまでは姑息の平和を結びますまいね」と念を押して見た時、白髮の老翁の眼は異様に閃いて、御安心下さい、大英國は伊達で戦争は

して居りませぬ」と答へた。此の老教授は最近其の一子を戦場で喪つたのである。(改造の歐米より)

一六 グラッドストーン 水野鍊太郎

グラッドストーンが英國の大政治家であり、近世の一偉人であつたことは、皆人の能く知る所である。氏は一八〇九年に生れ、一八九八年に逝去せられたが、其の間國會に席を有すること前後六十四年、首相となること前後四回、嘗に英國のみならず、實に世界政治界の大立物であつた。今左に其の傳記中より得た氏の平生を少し述べて見よう。氏は其の生活の大半を政治の舞臺に費したので、世人は氏

水野鍊太郎
内務大臣
法學博士
明治元年生

を以て單に一箇の政治家とのみ見るであらう。しかし氏は決して只政治一遍の人ではなかつた。或は總理大臣として、或は政黨の首領として、極めて繁劇なる職務に就いて居たに拘らず、未だ曾て讀書を廢したことがなかつたのである。氏は古今の歴史に精通し、神學及び經濟學にも趣味があり、兼ねて詩歌文章をも能くし、また佛語伊太利語を極めて自由に語り、殊に伊太利の書籍を多く愛讀し、彼のホーマーやダンテの詩の愛誦は、氏の最も得意とした所のものであつた。ホーマーの詩に關しては自ら研究したのも少くない。しかも其の研究は頗る價值のあるもので、流石専門の學者もこれには舌を卷いて驚嘆したといふ。晩年

report

Homero

ホーマー
希臘の詩人
西紀前九百年頃
の人。
伊太利の詩人
ダンテ
(1265-1321)

に至つては希臘羅馬の古文學をも研究し、有名なる歴史上、神學上の新著で氏の手に觸れないものは殆どないといふ位である。氏は又政治宗教に關する種々なる論文を雑誌



シャフトスドッラゴ

に投書したが、何れも筆鋒鋭利、論旨精確、専門學者の参考に資するに足るものが少くないと云ふことである。

氏は實に元氣旺盛の人であつて、話さない時には讀み、讀まない時には書く。政治壇上に立つて大演説を試み、役所に居つて公務を見る外、餘

暇さへあれば必ず讀書し、讀了つた後は直ちに自己の意見を之に付する。「彼には休息といふことなし」との一句は、實に彼を評する恰當の文句である。身は一國の大政を料理する首相の地位に居り、或は大政黨を率ゐる首領の劇職にありながら、尙かゝる餘裕があつて、讀書に著書に其の時間を利用する。實に感嘆する外はないのである。かの些細な職務を執りながら、或は多忙なりといひ、或は劇務なりと稱して、讀書の餘暇なきを口にするやうな輩は、氏の精勵を見て眞に愧死すべきである。

加ふるに氏は對話が巧妙に圓熟し、能く人を引附ける力を有して居た。是は氏の性質が快活で、澹泊なる爲にもよる

が、亦氏の知識が該博であつて、談話の材料が豊富であるがためである。氏は實に率直簡易で、少しも尊大の風なく、凡ての人に對し、常に同一の態度に出で、何人も彼には近づき易かつたといふことである。公務上に於ては頗る眞面目であつて、其の演説の如きは極めて激烈であつたため、或は氏を目して餘裕なき狹量の人とするものもあつた。しかし事實は決してさうでない。極めて洒脫な、往々頤を解かしめるやうな諧謔を交へ、人をして思はず對談に倦ましめなかつたのである。

氏は實に勇氣あり、決斷に富める人であつた。同時に事に當つて精密周到に考慮を盡す人であつた。故に、一つの問

題を解決しようといふ場合には、精細に之を調査し、可否の
 兩方面を比較し、輕々しくは之を決しない。若し時機が未
 だ到らないと見る時は、その時機の到來するのを待つので
 ある。しかも一旦決斷がついた以上は、萬難を排しても之
 を遂行せんと努め、あらゆる障害、あらゆる危険を犯して顧
 みなかつたのである。かの始には「豪語」しながら、少しの非
 難と故障とに遭遇して、逡巡し、躊躇するが如き似而非豪傑
 とは全く其の選を異にするものと言つてよい。
 氏は又朋友に篤く、部下に深切であつた。如何なる場合に
 も、其の僚友部下を捨てるが如きことをしない。故に氏と
 事を共にするものは、何人も安んじて其の命を奉じた。而

して、又然諾を重んずる古武士の風があつたから、秘密を守
 る觀念最も強く、内閣で決した事項の如きは、たとひ如何な
 る反對に遇ふとも、其の内情を打明けて之を辯解しよう
 とするやうなことは決してしない。どこまでも自己の操守
 を嚴にして、毀譽褒貶、一に他人の批評に任せたのである。
 蓋し多數の政治家の容易に眞似ることの出来ない點であ
 らう。

殊に政治家として氏に最も敬服すべき點は、何等黨派とし
 ての私心なく、偏見なきことである。されば其の政争をな
 すに當つても、只自己の信じて最も適當なりと認むる主義
 のために、どこまでも光明正大に奮闘するのであつて、決し

ジームス、ブラ
イス
英國の歴史家政
治家（一七〇一）

て陰險なる手段を以て敵手を陥るゝが如き卑劣なる行動
を取らなかつた。故に其の當時にあつて政敵として相争
つた人達でさへ、氏の人格の崇高なのに敬服し、今日に於て
すら尙之を稱揚して止まないものである。ジームス、ブラ
イスは氏を評して「正義高潔にして、何等の偏見なく、怨に報
ゆるに徳を以てする氏の如きは、各國政治家中、稀に見る所
であつて、實に欽慕すべき人格である」と云つて居る。「英國
の政争は士人の争である」とは、人の能く言ふ所であるが、其
の然る所以は、氏の如き人格の高級政治家が、之を指導する
が爲であらう。

今や我が國の人心漸く荒怠し、譎詐陰險、一時を糊塗する風

遠者の影
るしに
その

貝加爾
西伯利ノ南部ニ
アル亞細亞第一
ノ大湖
黒龍江
滿洲ノ北境ニア
ル大河
山岡熊治
陸軍歩兵中佐
旅順ノ役勳降使
トナツタ人
大正十年卒

の或は盛ならんとする時に當り、偶、氏の傳を讀み、深く感ず
る所がある。茲に其の一端を敘して、百年の後なほ氏を欽
慕する情を表した次第である。（斯民）

一七 朔北の天地

貝加爾湖畔、黒龍江邊、是ぞ我が失明中佐山岡熊治君が日露
戰役前幾度か出沒したりし處なる。

「牧羊邊地苦、落日歸心絕。渴飲月窟水、飢餐天上雪。」是、李白
の蘇武を詠ぜしもの。蘇武が漢節を持して十餘年間羊を
牧したりしは、實に今の貝加爾湖畔の地なり。

露支國境の滿洲里驛より鐵路西に走ること一千露里、曠野



氷結せし貝加爾湖と氷船

に飽き、森林に倦みて、氣秋に似たる且、突如として貝加爾湖の碧きを見る、詩思動かざらんと欲するも得んや。

氷結せる貝加爾湖は天下の絶景なり。所謂貝加爾鐵道成りて、結氷湖上、氷船の壯觀を失ひたれども、清絶なる湖色を十二分に味ひ得るは實に廻岸線の賜なり。

懸崖絶壁その脚を湖汀に浸し、碧山綠樹その影を漣漪にうつす處、所謂大西伯利鐵道の列

ヤリベシ

車、日に幾來往して、遠く亞歐の間を聯絡す。

列車の湖邊なる一小驛に停るとき、或は車窓に迫る、嶺角の草花を手折り、或は歩を碧瑠璃の湖邊に運びて秋の氣に浴す。亦長距離旅行の一慰藉たり。獨り此の好景に對して畫龍點睛を缺く憾あるは、湖上に一帆をも浮べざること是なり。平原民



シベリヤ地圖

2P
シカ
カ
ク

族たるスラヴの下層社會が終生魚の潑刺たるを知らざる、
以て想ひ見るべし。
貝加爾南岸鐵道は日露役中の敷設にかゝる。山岡中佐が
戰前西伯利の遍歴に際して湖南車窓の秋月を賞し得ざり
しは、今の中佐に於て特に遺憾の事たるべし。若し夫、シル
カ河に沿へる支線に由りて黒龍江上流のストレチェンス
クに達し、同江航行の定期船に客となりて、旬日、河上の人と
なるが如きは、邦人の避暑旅行として蓋し理想的たり。黒
龍江の下航、ストレチェンスクより東ハ、ロフスクに到る、
江上實に一千三百五十九哩、日を要すること約九日。上船
の夕、月眉の如く、船を棄つる夜、月已に圓なり。

シルカ
西伯利外貝加爾
州黒龍江ノ支流
ストレチェンス
ク
西伯利外貝加爾
州ノ都督

ハ、ロフスク
西伯利ノ東部黒
龍江岸ノ都督

黒龍江左岸の家は皆木造の矮屋にして、江上に浮べる船は、
所謂火輪船ならざれば則ち扁平なる曳船のみ。觸目皆是
前世紀のもの。
夜氣甚だ冷かならんか、曉天必ず濃霧あり。若し夫、江上一
面濃霧の世界と化し、停船空しく數時間に及ばんか、船客、船
員相會して互に談笑し、亦時間の空過するを意とするなし。
宛然是太古の景、太古の民。夜に入れば、紅色の燈火は支那
領の岸頭より輝き、白色の燈火は露領の巖角より到る。吾
等の汽船も亦紅緑の船燈を掲げ、兩岸の紅白燈を縫うて進
む。時に淡霧低く江面を壓し、夜氣靜に水に落つ
船進んで松花江の會流點に到れば、江水遽に濁りて江幅優

に四溟餘汪洋たる江上、只濁浪白波の洶涌するを見るのみ。

(世界を家としてに據る)

坪内逍遙

一八 蘇 武 讀 書

坪内逍遙

名ハ雄談
英文學者
劇文學家
文學博士
安政六年(三五九)
生

風颯々の	秋ふけて
吹きひるがへす	旅ごろも、
おもき君命	いたゞきて、
遠く匈奴の	國に入る。
野邊の草木や、	鳥のこゑ、
聞く物の音も、	見る色も、
いづれかえびすの	ものならぬ。

思へば遠く	來つるかな。
流れ行く水	音たてゝ、
胸に愁の	波高し。
故郷母あり、	雁鳴きて、
老の寢覺や	いかならん。
よしや幾夜の	草枕
旅寢の空に	果つとても、
國家の爲に	盡すべし。
君命重く、	身は輕し。
かうと覺悟は	定まりぬ。
使命つぶさに	傳へつゝ、

Dear

匈奴の王に	面接し、
蘇武は國書を	呈しけり。
もとより非道の	王なれば、
國書の趣意は	聽かざれど、
單身敵地に	使せし
蘇武が勇氣を	惜みつゝ、
ある時蘇武を	召しよせて、
「降り仕へよ、	しかあらば、
重く汝を	用ひん」と
説き諭せども、	聽かざれば、
國王大いに	怒をなし、

蘇武を捕へて	荒山の
いはやの中に	幽閉し、
食を與へず	苦しめぬ。
頃しも北風	雪を吹き、
寒さ膚を	つんざけり。
飢うれば枯草を	雪に和し、
いのちを繋ぐ	料となす。
日數経れども	死せざれば、
えびすら怪しみ	かつ怖れ、
この度は蘇武を	野に移し、
羊のむれをば	まもらせて、

「雄羊孕む

ことあらば

放免せん」と

あざけりぬ。

覺悟はしても

無念さに、



(蘇武節節圖) 邊渡山筆

眠られぬ夜も

幾たびか。

一夜雲なく

月澄みて、

秋も最中の

空の色、

せめてはかくてあることをと、

雁に託せし筆の跡。

かくて春去り、夏來り、

又秋の風、冬の霜、

落葉々々の重なりて、

十有九年の夢の間や。

老いて屈せぬ忠節を

天助けてか、不思議にも

雁の使のかひありて、

樂しき便ぞ聞えける。

國と國との和議成りて、

蘇武は赦され

歸りしが、

立出でし時の

黒髪は、

いつしか雪とぞ

なれりける。(國語讀本)

一九 讀 書

坪内逍遙

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを
覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも
慰み、不平憂悶も之を忘る。「書は少年の滋味にして老年の
娛樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰安
とを與ふ。家に在れば心を樂しましめ、外に出でたる時も
邪魔とはならず。夜の伴、旅の伴、僻地の伴」と羅馬の名士キ

キケロ
(第106—143)

ケロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の
讀書より受くる最大の利益にはあらず。
諺に「百聞一見に如かず」といへるは、何事も其の身親しく經
験するに如かずといふ意味なれども、人の壽命に限あれば、
七十八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何も
あるべからず。我が日本國內の山水風俗だけにても一生
には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の
窮なきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小さく、且少か
るべきは言ふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も
苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと
欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他

方には廣く内外古今の名著を得て之に親しまんことを願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた凡そ三千年



坪内逍遙

可なり。固より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なるものをも、遠く且大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして良書の助を藉ること

間に出でし大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又は
ランヒキに（イロハ）かけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも

なく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も、僅に一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑だにも正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は尙之に盡きたるに非ず。

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、予に良友あり。彼等は皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。是良書が常に其の讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あるをいへるなり。明米の名士チャンニングも亦曰く、吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に

ペトラルカ
(1304-1374)

チャンニング
(1750-1842)

ミルトン
(1608-1674)

因る。而して、かゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人のために吐露すと。英國の詩人ミルトンもまた曰く、良書は保全踏襲して後世に傳へられたる俊傑の貴重なる生血なりと。
人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なることかくの如きものもあるかと歎ずるなり。若し假初にも其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに、私淑し、之に倣はんとす

黒田清成

る志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしといふべし。
中學修身訓

二〇 古今千遍

雨森芳洲

舊歲御状相達一御返書未仕候うち
新歲の芳翰又々相達一忝々拜見仕候弥
御仕固に以重業成る候中欣感此事に存
奉り此許相愛ふ事社儀無爲に罷在候兩度
昔に御佳作見せり候上京以後別々
御精書小紙事一に座在候格別に以達

雨森芳洲
名ハ誠清
對馬侯ノ儒臣
寶曆五年(西二二)年
歿
年八十八

初雨

五千遍は昨日迄に讀みおけ申し候今迄の積り不
 致候へば八十四の七月に千遍の數満ち申候積りに
 御座候其間に老耄致るか又は閻羅王より勾死鬼
 にお遣はし申候事候べき様も之なく候と
 申す願を満し候心に御座候右千遍讀みおけ
 たり候を讀みたり候心に御座候是は壽命の事ハ
 わきふのけ置きとてお別には座居へばさり候を
 き事に御座候候し私最早世間に望ある者候之
 なく候為らば致して死を待ち候し一奇事と

柴田鳩翁
 通稱ハ謙藏
 心學者
 天保十年(一四九)
 歿
 年五十七

存じ立ち申事に御座候此段書きつけ御目に懸け
 候ハ老人ながら存候事に御座候故皆様候
 御年少小御座候事ハ尚候に
 候事候様申上度此の如くに御座候同志の面
 へ御参會方節以旨御傳へ成し候事候様
 奉り候申度事ハ御座候為らば老筆堪へ難く
 早貴答に及び候餘は後書を期し候恐謹言

(新撰書簡集)

二二 南京の壺

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役の人々、一同に座に就きますると、さまざまの馳走がある。時に、かの年寄は、酒と聞いては笹の露にも酔ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちと、御菓子なりとも御取りくだされい。」と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて来る。座中も、これは好いお心附、ひらにお菓子を召しあがられい。」とすゝめる。年寄もわるうはなし、然らば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突込みしなにし、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出

年寄
心附
御酒
御菓子
御退屈

さうとするに、手首がつかまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々にこじまはして見ても、ひつばつて見ても、抜けず、まご／＼して居らるゝと、傍から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや手が少しつまりました思ふやうに抜けませぬ。」と眞顔になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向ふへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手の前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保谷が鉦曳をするやうなと、座中が一同にとつと笑へど、年寄はなかなか笑はず、泣顔になつて、「どうも痛んで抜けませぬ。」といふ。さあ、これから大騒になり、醫者どのを呼んで來い。接骨で

景清
悪七兵衛平景清
美保谷
美保谷十郎

司馬溫公
名ハ光
宋代ノ大儒
（二五九—二六六）

はいくまいか」と酒宴の興も醒めはてました。時に五人組が一人進み出て、「いづれもお騒ぎなされな。我ら承つたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の子供と共に大きな壺のほとりに遊びましたが、一人の子供、過つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた子供は不思議に命を助りました」と或人の話ちや。今お年寄の御難澁は、この話によう似てある。いざや、我等が司馬溫公となつて、たとへばその古染附けの壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、しかつ

べらしく煙管を提げ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金米糖が散らかつて雪を降らした様になると、「やれ、お年寄お助りなされたか」と其の手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんで居られたと申すことぢや。何と、をかしい話ではござりませぬか。

つかんだものを放しさへすれば自由自在に手は抜けたものを、一度つかんだら首がちぎれても離すまいと片意地なうまれつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば金錢の事のやうなれど、つかむものはこればかりではない。腕前のあるのをつかみ、賢いをつかみ、負けをし

みをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで離すま
いとかつぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事
もならず、慎も出來ず、せん方なさに癩氣抑へたり、顔しかめ
たり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござ
ります。壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢ
や。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

(鳩翁道話)

高山樗牛

名ハ林次郎

評論家

文學博士

明治三十五年歿

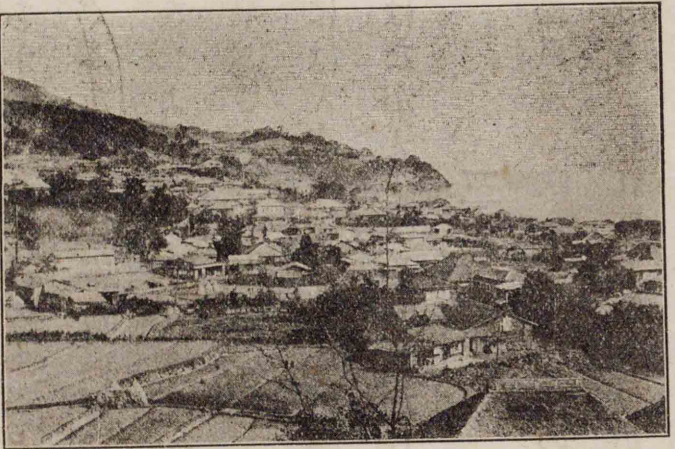
年三十二

二二 わが袖の記

高山樗牛

熱海の冬

熱海のふた月はまことに楽しきあはれ深き冬の暮なりき。



熱海

よそならば吹雪にとぢられて、日影も薄き冬の眞中も、名に
し負ふ暖地なれば、こちふく風
も寒からず。むつきはじめの
梅が香は、はやくも春を告げわ
たりて、野邊のやけあとの萌え
そむるは、人の心もときめくこ
ろか。苦屋どもに岩海苔のか
をれるもをかしく、蘆の屋に心
細く立ちのぼる煙ものどかな
り。

海原遠く見渡せば、相模・安房の山々雲か霞のすがたおもし

大島 伊豆列島ノ一
 沖の小島 箱根路をわが越え
 えくれば伊豆の海や沖の小島に
 波のよる見ゆ (源實朝)
 初島 熱海ノ東南海上
 三里 魚見崎 熱海町ノ南端ノ
 岬

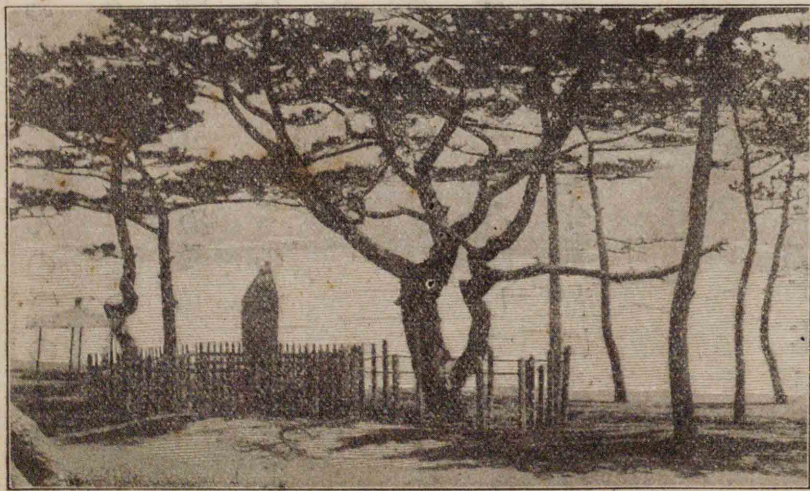
ろく、大島が根に立つ煙の風にたなびけるに、水や空とも分
 ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし。初島わたり漕
 ぐふなうたの寄る浪毎に聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこ
 なたより渚をつたうて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れ
 飛ぶさまもいとをかし。後には日金十國の山々を負ひ、前
 には天空海潤の間に一灣の春を擁する豆南の風光は、筆に
 はなかくに及びがたし。

三保の春

松風遠く吹合はせて、波の音もかすかなる、物思まさる夕な
 りき。われひとり清見が關の宿を立出でて三保の松原に
 遊ぶ。入日の影は雲にのみ残りて月未だ上らず。田子の

龍華寺 駿河國阿倍郡不
 二見村ニアル法
 華宗ノ寺

浦曲の夕なぎに、千鳥の聲も
 いと稀なり。江尻清水をは
 や過ぎて龍華寺の輪塔を右
 手に見る。袂に寒き山嵐に、
 入相の鐘を吹送りて、初春の
 あはれ一入深し。三保に辿
 り着ける頃は、月やうやく上
 り、清見潟の水煙は闇路遙に
 立ちこめて、富士の高嶺に雪
 の色白し。見わたせば一帯
 の松林、木ぶかく生ひしげれ



三保松原の松

るかな。木立の飾へる月のあかりに、残んの雪の色冴えて、
杜の下道杳かなる霞に落つる影もなし。波の音やうやく
近くして、われは羽衣の松に添うて立ちぬ。
羽衣の松はわが年久しく思ひこがれしものなりき。よし
さらば、今宵は月と共に立ちあかさんかな。
松は早く枯れて、幹の朽ちたるが残れり。そのもとにゆか
りを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして今は見え
わかず。あはれ波の音と松風とのみぞ、今も昔にかはらざ
りける。(文は人なり)

二三 雪山の眺

鹿子木員信

鹿子木員信

哲學者

文學博士

慶應大學教授

再び行進を起して行くこと幾ばくもなく、楊樹と菩提樹の
並木の繁つてゐる幅の廣い往還を棄て、右折して狭い田
舎道を西に向つて進む。それより何處をどう通つたか、今
は記憶に明かでない。記憶に残つてゐるのは、唯紆餘曲折
幾度か數多き印度の村落を通り、遅々たる牛車の上に、その
軋る千篇一律の音を夢幻と聞きつゝ、揺られくゝて居た事
ばかりである。

流石に強烈な印度の太陽も西に沈んで、夕闇の影が音なく
印度の平野を蔽はうとしてゐる。ふと北を望めば、影黒き
ヒマラヤ前山の上に、ヒマラヤの雪山が、夕闇の中にもしる
く、夕榮の光にその白銀の鎧を薔薇と匂ひ輝かしてゐる。

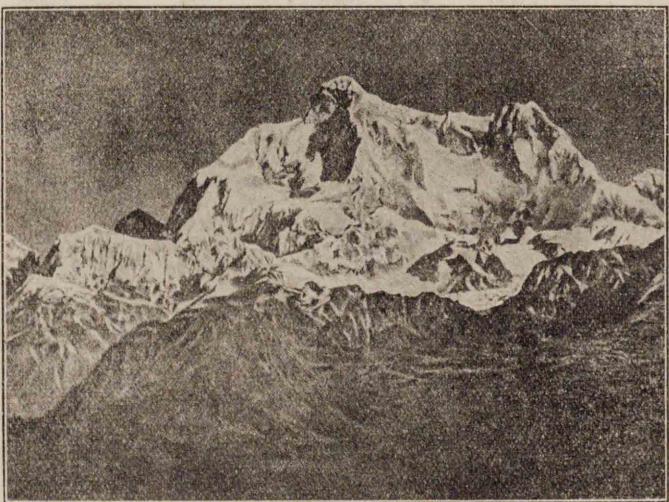
薔薇の色はやがて桔梗の色とうつろひ、桔梗の色は見る見る褪せて、いつしか夕闇の中に搔消す如く隠れ去つた。我等は酔へるが如く此の崇高神祕なる世界の美に見とれた。現世の混濁雑多の裡に、ともすれば尊いもの、いみじきものを忘れ去らうとする我等に對して此の不思議なる美の顯現は、神の默示のやうに思はれた。而してこれ實に冬季數月に互つて、雲翳の少い印度の空に、若い釋種太子が仰ぎ見られたものではないか。

その昔釋種太子の仰ぎ見し

そのヒマラヤをわれ仰ぐなり。

斷食多勞の日は暮れた。夕闇は我等の周圍に其の黒い緞

子の幕を垂れた。しかも我等の牛車は其の歩みをやめな



雪のヒマラヤ山

い。闇の中に遙に燈火を認めて、あれこそ我等の宿であらうと待設けてゐると、我等の牛車は事もなく其の燈火の村を過ぎて行く。我等は案内人が我等を何處へ連れて行かうとしてゐるかを知らぬ。否、恐らくは案内人自身も知

るまい。印度の農民は實に暢氣の權化である。

日が暮れてから闇路を縫ふこと三時間餘、九時過ぎて、我等はさる屋敷の構内に牛車を乗り入れた。このあたりの英吉利の大地主の屋敷であつた。門内に戸もない打開きの小屋がある。日が暮れて泊るに宿なき旅人の爲に拵へたものである。我等はこゝに落着き、主人の好意で雞一羽と米少しを得、之を煮、之を炊いで、此の日始めての食事にありついた。(佛蹟巡禮行)

二四 岩倉右府 その一

井上 毅

月日の小車は旋りくく、て流るゝ水よりも早く、故右府公の世を去り給ひしより、今ははや十年餘りぞ過ぎぬる。

井上毅
文部大臣
子爵
明治二十八年薨
年五十二
故右府公
右大臣岩倉具視
明治十六年薨
年五十九

野々口隆正
國學者
明治五年歿
年八十

大詔のまに、我が國を富士がねの安きに置かてやはと思ひ入り給へる公の一筋の誠心は、天地の間に滿ち渡りて、窮みなき後の世まで語り継ぎ聞き繼ぐべければ、今更に言ふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出づるまに書き記して、世の鑑ともし、史人の料ともなさん。維新の初に、神武の古に復るといへる大義を定められしは、この公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の説に、建武中興の振はざりしは、當時の搢紳いんしんにその人なかりしによれり。源親房卿は學識ありて時の帝の御覺えもめでたかりしかど、その人の所見は延喜天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ公家武家の間に隙を

生ぜしなれといへり。

故右府公は摺紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に大勢を達觀して王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へるは、これぞ明治の朝廷に人ありと申すべき。この一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば總て破竹の勢を以て破りたり。世の人は、明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。

徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて久しき間

大政返上
慶應三年十月十日

岩倉村蟄居

文久二年九月山城國愛宕郡岩倉村ニ蟄居サレタ

玉松操

京都ノ人

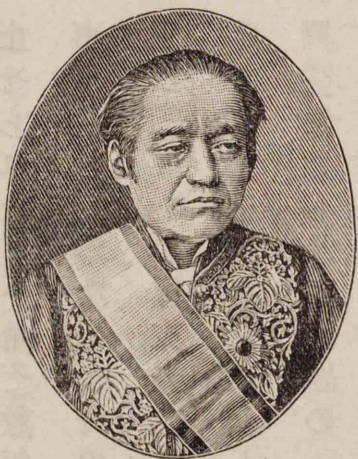
勤王家

明治五年歿

年六十三

大令

慶應三年十二月王政復古ノ大令ガ下ツタ



岩倉具視

て、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。

この時、大勢なほ定まらずして物論紛々たりしに、公は俄に躬を以て責に當り、従容として應答せしかば、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關議奏、傳奏を廢し、親政の洪

圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を立てられたるは、實に公の輔翼の力なり。就中復古の第三日に、禁闕に達文を掲げられて女房の請謁を納るゝことを痛く禁止せられたるは、是ぞ數年の宿弊を除き、將來の爲に一大美事を遺したるなる」と、公の晩年に親しく物語し給ひき。

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂みとなし、夙に神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策する所あり。公は玉松の功を推して、「己の初年の事業は皆彼の力なり」とまでのたまへり。薨去の前年に、一夕ことさらに余を召して玉松の履歷を物語し給ひ、その人の

功績を空しくなせそ。書き記して後の世の語り繼ぎの料とせよ。」と慇懃に仰せられけり。此の夜、余は他の二人を誘ひて俱に侍りしが、その中の一人は漏れなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に譲り給ふこといとめてたし。

その後、公の朝廷に勧めまゐらせて、斷然と開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は、姦雄に誤られたりとの一語を言ひ放ちて公の許を辭し、召されても應へだにせず、一室に屏風をたて籠め、その中にて讀書に日を送りけるが、功を論じ賞を頒つ日に逢はずして世を去りぬるぞ歎かはしき」と公ののたまひし。

諸名士
大久保利通
木戸孝允
小松清康
廣澤真臣

公は蟄居していましながら、その家の裏の隠戸より、人知れず大久保木戸小松廣澤等の諸名士を引きて内外の大勢を談論せられ、此の時已に鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を知らざりけり。彼が口惜しく思ひつるも理なりき。以上

二五 岩倉右府 その二

井上 毅

維新後の公が翼賛の功は、明治の大御史と共に後の世に傳ふべきなれば、こゝに書きつゞくる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語り合ふことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と

二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しく言ひはやせど、この事のおこりは十五年にて、公はあかず思召すことありて一方ならず心を盡し給ひ、そのをり一たび中止となれり。されども公は深く祕め給ひて、文書一箱ほどもあるを家に藏めて出さざりしかば、内々の人ならでは、え知る者なかりき。此等は後の人の鑑にこそ。

剛膽は政事家の第一要徳なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに剛毅の徳を備へおはしけり。征韓の議、今にも蕭牆の内に變亂を見んとする時に、陸軍將校の中に、武勇の聞えある一人は公の邸に參り、客室に謁見し、一

應二應議論の末、怒れる眼血をそゝぎ、毛髮倒に豎ち、脇差を左の手にて鞘も撓むばかりに握りつめ、貴殿若し意見を枉げ給はずば、御身のために悪しかりなん」と言ひ放ちつゝ、膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時、公の家の侍ども次の間に控へ居て障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ内の人の物語りし。公のかしこきあたりの御覺え殊にめでたかりしは世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて人はあらずじと思ひ給へる隠さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は筆に載するも畏

ければ漏らしぬ。

公は大久保故内務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村塾居の折より、大久保卿は密々の往復しきりなりしが、公の身の上心もとなし。とて、夜な〜年少き侍を遣はして守衛せさせつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り給ふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後十年こそは内治を整理し民利を進むる時なれとて、將來のために大いに計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉とは

なりぬ」とのたまへり。

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを世に知らせん爲の計らひとぞ聞えし。

公は勤儉の二字を大政の本として輔弼に心を盡し給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、岩倉村の蟄居の時をな忘れそ。とて、常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで守り文にせよ。とて子孫に遺し給ひしが、その附録一篇は専ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にいましたつゝ、親しく旨を授

けて侍ふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ。とありきとなん。

公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝四時前には目を覺し、侍やある。と聲かけさせ給ひ、今日は何某をば何時に召せ。次に、何某をば何時に呼べ。又明日は何某に、何時に來れ。何某に、夕何時に參れ。と記して申遣はせ。など仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとなん。

公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後

より思へば、十五年の頃より、何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬或人のもとに贈り給へる書の末に、

きりやもとのたやる浦比藻鹽草、

たがおりあちてゝづきあぐらん。

とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。

公の平生の仰に、「大臣たるものはその進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人

臣の標準は示さぬ」とのたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げん事を思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐら

(藏爵子上井)蹟筆視具倉岩

せしも聽き入れず、是非にとて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞届けさせ、厚き惠の御勅をさへ下し賜ひけり。かくと承り

て、公はさしにも重き衾を押退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、いそぎ家の子らを召しつどへられ、「今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ盃まゐれ」とて酒を賜ひけり。人

人よろこびの色をなしたりけるが、さてその翌日に事重ら
せたまひぬるぞかひなき。今はのきはまで、夢幻の間にも
おほやけの事のみ心に懸けさせたまひ、なからん後の事ま
でも人もて雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきと
なん。

余は本末の序もなく思ひ出づるまゝに書き続けぬ。あは
れ、この文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草を、い
やつぎくにかづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下
の靈を百載の後にまで慰めよかし。(梧陰存稿)

二六 君が御蔭

源實朝
鎌倉三代ノ將
軍
承久元年(一一九〇)
薨
年二十八

本居宣長
徳川時代ノ國學
者
享和元年(一八六一)
歿
年七十二

よみ人しらす

流はぬのこねのふもかげはあれど

君がうらぐまのすけはなす

源 實 朝

うはさけうきはあせらんよるうらむ

きみたあはれらわがあめや毛

本居宣長

まつまねやまをひそほげ

あそひこほふやまがくくらそ

加納諸平
徳川時代ノ歌人
安政四年(三三七)
歿
年五十二

あつたはらりけしませらるる

加納 諸平

みせげやとねふとよのまらぬ

櫻 東 雄

櫻東雄
徳川末期ノ志士
萬延元年(三三〇)
歿
年五十

あつたはらりけしませらるる

やまのくにのまのあつたはら

二七 巴里より

島崎 藤村

暖い雨が降つて来るやうになりました。来るか来るかと思つて此の雨を待侘びて居た心地はありません

でした。私どもは五箇月も前から旅の冬籠の間唯そればかり待つて居たやうなものでした。さう申しては何ですが、私どもの周圍にあつたものゝ事を思つて見て下さい。佛蘭西國境の山地寄の方では、塹壕が積雪の爲に深く埋められたとか、戦線に立つ者の霜焼を救ふ爲に毛布を募集するとか、さういふ勞苦を思ひ遣る市民の心が今日まで續いて來ました。開戦以來五十萬の佛蘭西人は既に死んで居るといふ話です。此の戦争が終る頃には、満足な身體でもつて巴里へ歸つて來る者は少からうといふ話です。私共が町で逢ふ留守居の婦女でも、老人でも、子供でも、やがて來る

春を待つて居ないものは無いやうでした。寒苦寒苦、此の避け難い戦争の悩みの中で、世界の苦みの中で、草木の再生がやがて自分等の再生である事を願つて居ない者は殆どありませんまい。

去年
大正三年
プラターヌ
スマカケノ木
マロニエ
楡ノ木

去年に比べると、今年は並木の發芽もずつと後れました。プラターヌの木などは、まだ冬枯そのまゝです。漸くマロニエの芽がぼつ／＼膨らんで來た所です。併し日は餘程長くなりました。空も明るくなつて來ました。もはや煖爐なしに暮せます。一雨毎に、私は春の來るのを感じます。有らゆる草木が生返る中で、やがて來る若葉の世界を待つのも楽しみです。あの、白

い蠟燭を立てたやうなマロニエの花が、若葉の間に咲いて、冷たい硝子窓からも、石の壁からも、春の焰が流れて來るやうな日は、最早遠くはないでせう。

さういへば、燕のかはりに獨逸の飛行船が飛んで來ました。レオン、ドーテの言葉ではないが、あの「空中の海賊」が巴里の市中と市外とに爆弾を落して行つたのは三月二十三日の夜でした。損害も大した事はなかつたといひます。實は私などはそれを知らずに熟睡して居た位です。「あの昨夜の騒ぎを知つて居るか。敵の飛行船を目がけて撃つた深夜の砲聲を聞いたか。」と人に言はれて、始めてさうかと知つた位です。「なぜ

レオン、ドーテ
現代ノ文學者
(1860—)
三月二十三日
大正四年

獨逸軍はあんな詰らない事をするのか。斯う人々は言合ひました。「恐らく獨逸軍はそれを何等かの政略に供し、新聞紙上に吹聴し、漸く戦争に疲れて來た國內の不平の聲を静めようとするのであらう」。斯う言ふ人もありました。翌二十四日には、町々の警戒は一層厳しくなり、有らゆる街路の燈火は消されました。そよそよと吹く南風が流れて來るやうな夕方でした。淡い新月の光も空にありました。火ともし頃には、や窓を閉めるのは惜しい氣が致しました。其の晩は床に就いてからけたゝましい物の音に眼をさましました。自動車で飛ぶ警戒の喇叭が深夜の町々を驅けめ

ツェツペリン
獨逸ノツェツペ
リン伯ガ工夫製
作シタ飛行船

ぐりました。翌朝になつて、また敵の飛行船が近づいたことを知りましたが、佛蘭西側の飛行機に邀へ襲はれて、其の晩は巴里まで來られなかつたとのことでした。今は巴里も一時の様に包圍されかゝつた位置ではないし、市は出来るだけの警戒を怠らないし、露西亞の戦報は壞太利方面の勝利を傳へて居る際です。獨逸のツェツペリンが襲つて來たといつても、他で聞き、電報で傳へられる程の騒ぎでもない事を申し上げたいと思ひます。

七時の夕飯時も來ました。今一回此の御便を書き足したいと思ひますが、今日はこれで筆をとめます。

三月二十六日
大正四年

三月二十六日

(戦争と巴里)

近衛文磨

公爵
講和全權委員隨員

二八 平和は成れり

近衛文磨

明治二十四年生
六月二十八日
大正八年

六月二十八日、朝來暖煙軽く揚りて、曉風爽かなり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列ピーブラフランセーを唱へて旗を振りつゝ市中を練り歩き、自働車の如きも、亦思ひくゝに装を凝らしたり。憶へば過去五箇年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に、心膽を寒からしめし事も幾度ぞ。今や乾坤一轉して、藹然たる瑞氣の搖曳するを見る。巴里人の今日の喜や、實に想察するに餘りありといふべし。

ヴェルサイユ宮
佛國巴里ノ西南
十一哩ヴェルサ
イユ市ニアル宮
殿
ルイ十四世ノ建
テタモノデ世界
第一ノ立派ナ宮
殿トイハレテキ
ル

クレマンソー
當時佛國首相

此の日ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるものありしが、宮殿正門前の大通は帚目正しく掃き清められて一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。兩側に堵列せる共和衛兵の銀色の兜と白き鹿革の袴下と黒く光れる長靴とは、光彩陸離として莊重なる此の日の儀式をいやが上にも莊重ならしめたり。午後三時、各國全權委員は皆已に入場し、招待を受けたる人々及び新聞記者等も亦、處狭きまでに詰込みて、さしにも廣き鏡の間も、些の餘地だになかりしが、今は近世の歴史に最も光輝ある儀式を前に控ふる事として、流石に咳一つ聞えず、滿場静まり返れり。見渡せば、庭園に面して置かれたる長き卓子の中央にはク

ウィルソン
當時ノ米國大統領



ウィルソン

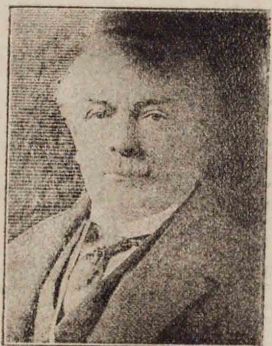
ロイドジョージ
當時ノ英國首相



ロイドジョージ

レマンソー氏例の如く椅子に深く腰をおろし、向つて左にはウィルソン大統領を始めとして米國委員、次に伊太利委員、次に白耳義委員あり、又ク氏の向つて右にはロイドジョージ氏を始として、英本國委員、次に英植民地委員、次に我が日本の委員西園寺公爵を始め、順次に居流れたり。何れも黒のフロックコート姿にて、華麗眼をそばだてしむるものとは一も見當らざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名なる噴水池の周圍には、和共衛兵圓

陣をなして整列し、其の背後には、特に今日に限り庭園まで



ジョージドロ

入るを許されし幾千の人々堵の如く並びて、調印の終るを今や遅しと待ち構へたり。

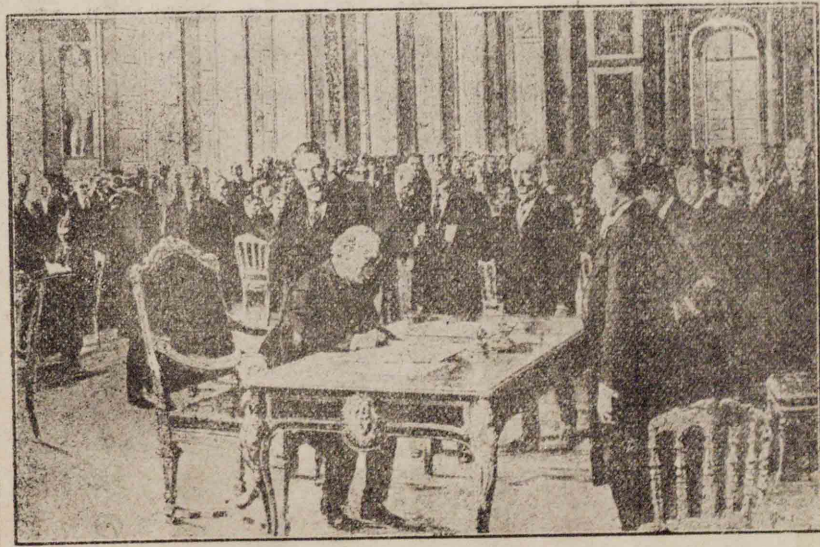
扉は開かれて、満場の視線一時に其の方に注がるゝや、やが



西園寺公望

て、二名の獨逸委員は幾多の佛國將校に見守られつゝ、入場し來れり。先なるは新外相ミュラー氏にして、後に續けるはベル氏なり。何れもフロックコートを着し、稍、俯向き勝に極めて物靜かなる態

を粧ひつゝ、日本委員の隣なる定めぬの席に着けり」
席定まるや、クレマンソー氏は徐ろに起ちて、先づ獨逸委員より調印すべき旨を告ぐ。茲に於て獨逸委員等はやをら起ち上り、案内せらるゝ儘に、クレマンソー氏の直前、條約の正文を置かれたる卓子の前まで歩を運べり。



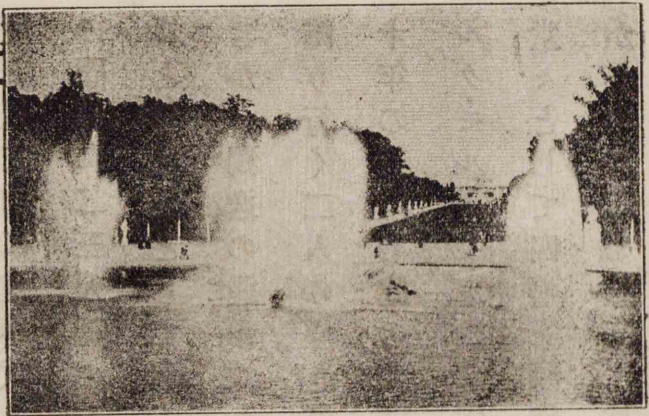
平和條約調印の光景

彼等は平靜にして殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み、代るゝ條約の正文に署名したり。其の間僅に二三分時のみ。嗚呼幾百萬の人命と幾千億の財貨とを犠牲として漸く贏ち得たる最後の結果はかくの如きか。獨逸の運命はかくして定まり了んぬ。見よ自席に歸り行く二人の黒き姿の淋しくも憐なるを。之を彼の五十年の昔、同じ此の大廣間に於て、ウイリヤム老帝がビスマルク・モルトケを始め雲の如き賢臣名將に圍まれつゝ、威風堂々として四邊を壓倒したりし當時と對比し來れば、何人か心中無限の感慨に打たれざるものあらんや。
獨逸委員の座に復するや、ウイリヤム老帝が先づ座を立ち、續い

ウイリヤム老帝
獨逸ノ君主
(1797—1888)
ビスマルク
獨逸ノ大政治家
(1815—1888)
モルトケ
獨逸ノ名將
(1800—1891)

て四名の米國委員之に従ひ、同じ卓子に至りて署名せり。

次にはロイドジョージ氏を先登として英本國委員、次に英植民地委員、次に佛國委員、次に伊太利委員、次に日本委員の順序にて、各一團づつ代るゝ其の卓子に於て署名し、かくて最後のウルグアイ委員に至る迄、時を費すこと四十分、三分、調印を了したる國々は、山東問題に關する要求の容れられざ



水噴大園公ニイサルエヴ

山東問題
日本が獨逸ノ租借權ヲ繼承シテ經營シテキル山東省ノ青島ヲ支那ニ還附スル事

りしを理由として之に加らざりし支那を除き、凡て二十六

個國、調印の全く終りしは午後三時四十九分なり。

是に於てクレマンソー氏肅然として起立し、莊重にしかも簡単に宣言して曰く「平和は今や成れり」と。此の時世界に類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊に迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は宮殿の内外に蝟集せる幾十萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新なる世界の出現を祝しぬ。
(戦後歐米見聞録)



広島大学図書
2000080454
